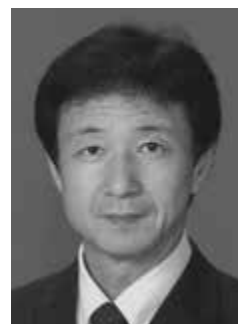


学校を
創る

笑顔とチームプレイ ～「槇の実」の取組～

県立槇の実特別支援学校長

ほりえ ひとし
堀江 均



1 はじめに

本県には現在、県立特別支援学校が36校ある。その中で、名前に地名がついていない学校は、松戸市にある「つくし特別支援学校」と「槇の実特別支援学校」の2校のみである。そのため「槇の実ってどこにある学校か」とよく聞かれる。答えは袖ヶ浦市である。もともとこの地にあった袖ヶ浦養護学校（肢体不自由）が千葉市に移り、分校（知的障害）であった「槇の実」が昭和54年9月に「槇の実養護学校」として独立し、その後「槇の実特別支援学校」と改名され、今年度めでたく創立40周年を迎えることができた。「槇の実」という学校名は、本県の県木である「槇の木」が雨や風に強いことから、「丈夫に育て」と、子供たちの成長への願いを込めて付けられた名前である。開校時、50名だった児童生徒数は現在では約3倍の140名になった。

「100歳まで明るく元気に生きる」

これは、本校学校教育目標の冒頭の言葉である。これからは人生100年時代。卒業後、地域で明るく元気に100歳まで暮らせる「生きた力」をつけたいと考えて目標とした。

特別支援学校の一つの良さである、小学部1年から高等部3年までの12年間という長い在学期間を生かし、子供の持てる力を最大限につけていく使命があることを教職員に伝え、「笑顔とチームプレイ」をモットーに、様々な教育活動に取り組んでいる。

2 「槇の実」の取組から

(1) 授業充実のための話し合い

本校では毎週金曜日の放課後に「授業充実のための話し合い」という時間を設けて

いる。そこでは教科や分掌ごとに教職員が集まり、授業の振り返りやチームティーチングによる支援の成果と課題の確認を行っている。特別支援学校では、チームティーチングの充実が必要である。こうした定期的な指導支援の話し合いが、若手教職員の育成にもつながり、チーム力と専門性を高めるとともに、子供たちの成長につながっていくと考えている。



授業充実のための話し合い活動の様子

(2) うたのもくようび

明るい笑顔があふれる学校づくりには元気な歌声は欠かせない。そこで、まずは大人から声を出していこうということで、木曜日の朝の打合せは「うたのもくようび」と題して、教職員による歌の大合唱から1日が始まる。

学期の歌や行事でのオリジナル曲などに、コミュニケーションサインを振り付け、心をひとつにして歌うことで、教職員間のきずなも強くなっていく特徴的な活動である。



朝の打合せ「うたのもくようび」の様子

(3)スポーツを通して地域交流

今年度、本校は県教育委員会から「障害者スポーツ振興事業」の指定を受けている。これを活用し、これまで行ってきた交流及び共同学習を一步発展させる試みを計画し実践した。

①「知ろう！伝えよう！関わろう！」

このスローガンの下に、袖ヶ浦市内の小学校、中学校、高等学校とスポーツを通してお互いの良さを知り合う機会を設けた。

小学部では、かねてより近隣の袖ヶ浦市立蔵波小学校の3年生と学校間交流を行ってきたが、今年度は障害者スポーツであるTスローを取り入れ、6月に2日に渡って交流会を行った。子供たちは各クラスに分かれ、教室からは元気いっばいの声が響き渡っていた。

中学部では、6月と7月に袖ヶ浦市立根形中学校の1年生と、10月と11月には袖ヶ浦市立蔵波中学校の1年生と、パラリンピック種目であるボッチャを通して初めてのスポーツ交流会を行った。同年代の生徒たちが一投ごとに歓声をあげて大いに盛り上がり、交流を深められた。

高等部では、県立袖ヶ浦高等学校の生徒と相手校の選択授業の時間にボッチャ交流会を行った。



スポーツ交流会の様子

大きな体育館で、若者たちの熱い真剣勝負が繰り広げられ、理解し合える場となった。

「一つのスポーツを通して、短い時間の中でもこうして交流ができ、一緒に笑うことができるということがわかり、良かったです」など、事後に実施した生徒アンケートでは、たくさんの胸を打つ感想をいただき、こうした機会を今後も作っていくことの大切さを強く感じた。御協力いただいた

校長先生はじめ関係された教職員の方々、そしてなにより子供たちに感謝の気持ちでいっぱいである。

この他、校内では学部を越えた兄弟学級グループによるボッチャ集会を行って小学部・中学部・高等部のつながりを深めてきた。

余談であるが、ボッチャが上手になると、余暇活用でのボウリングでも高得点が出るようになったとのことである。

また、障害者スポーツのトップアスリートを招いての、ボッチャやランニングなど実技研修会では、子供たちにとってスポーツの楽しさやすばらしさを改めて知る機会となり、各種大会での技能向上につながった。

こうした取組は家庭にも浸透し、親子ボッチャ大会の他、PTA主催の各学部保護者対抗ボッチャ大会も開催されるようになった。

②地元アクアラインマラソン応援

「地域に開かれた学校づくり」に向け、袖ヶ浦市との関わりを深め、アクアラインマラソンの沿道応援を行った。

市役所前に集まって、児童生徒による太鼓と踊り、横断幕を使った応援を通して、地域行事へのつながり及び生涯スポーツとしての走ることの楽しみを知る貴重な機会となった。

3 おわりに

私たち教職員は、これからも地域で共に学び育つ教育の推進を図っていかねばならない。「槇の実」の子どもたちは、名の由来通り丈夫で元気一杯に毎日を送っている。その一人一人が卒業後も、地域社会で自分らしく生活していくための「生きた力」を身に付けられるよう、日々の指導支援を大切にしながら「笑顔とチームプレイ」で、一丸となって取り組んでいきたい。



「教職員の業務改善」について 教頭としてできること



我孫子市立湖北台東小学校教頭 なかの なおみ
中野 直美

1 はじめに

昨年度受講した新任教頭研修の情報交換の際、常に話題となったのは、「教職員の業務改善」についてであった。これに加えて「メンタルヘルス」と「不祥事防止」についても常に話題となったが、この2点の予防の観点でも「教職員の業務改善」が喫緊の課題である。

本校は、我孫子市の東部に位置し、通常学級12学級、特別支援学級4学級、全校児童300名と我孫子市内でも比較的小規模の小学校である。職員は育児休業中の者もあり学級担任16名中4名が講師である。また、学級担任のうち10名が30代以下となっており、教職経験10年未満の担任は8名である。

「超勤80時間」「メンタルヘルス」「不祥事防止」等の問題も踏まえて、若年層教職員の「業務改善」に積極的に関与し、職場環境を整えていくことが、教頭として重要な職務であると考えている。

2 教職員の業務改善に向けて

(1) 多忙化解消の視点を見つける

年度初めに、全教職員に本県から出されている「業務改善リーフレット」を活用し、「超勤80時間」を越えないように働くためには自分は何の業務をスリム化することが可能なのか、その為にはどんな取組をするべきかを考えさせた。それぞれの立場で削減できそうなものを探し、全教職員で「超勤80時間以内」を目標に取り組んできた。

管理職の立場から若年層の働き方を分析すると、教材研究・校務分掌上の諸活動・事務処理・生徒指導・保護者対応に多くの時間を費やし、勤務時間が超過していることが分かった。

(2) 多忙化解消に向けた取組

本校では、放課後はできるだけ職員室で仕事をするようにしている。校務分掌上の諸活動や事務処理などは、昨年度の流れが分かっていたり、処理の仕方が分かっていたりする教職員が気軽に声をかけ、若年層教職員の悩む時間の軽減につなげている。

教材研究や授業準備に関しても個人ではなく学年で行うことで、より深い視点で研究ができ、役割分担することで授業準備もスムーズに行えている。また、学年での話し合いが職員室というオープンスペースで行われているため、他学年からの助言や管理職からの助言も入りやすく効率的である。

生徒指導や保護者対応に関しても、職員室の中での何気ない会話の中から大きなトラブルにつながりかねない「芽」に周りの教職員が気付き対応するということもできている。

(3) 管理職としてできること

本校では、放課後の職員室にいと、その日に各学級や学年で子供たちがどのような活躍をしたのか、どのような課題が生じているのかが把握でき、適切な初期対応への助言や支援ができる。生徒指導や保護者対応は初期対応が肝心である。初期対応を

間違えるとその後の対応には驚くほど時間がかかる。若年層教職員の多忙化解消のためには、生徒指導・保護者対応の支援が最も効果的である。

その為には、教職員にとって職員室が居心地の良い場所であることが大切である。居心地が良いというのは、子供たちの話題にあふれ、共に喜び共に悩んでくれる仲間がいること。また、お互いの家族のことなども気軽に話題にできるような環境であること、などである。

管理職として心掛けているのは、常にアンテナを高くし、率先して子供たちや教職員の頑張りを讃える、悩んでいる教職員にはこちらから声をかけていくことである。以前、民間管理職研修を受けたときに、「部下が『報・連・相』を行わないのは、管理職に『報・連・相』を行ってもメリットがなく、相談しても無駄だと感じているからだ」と教えられた。

本校の教職員は皆、毎日、学級での子供たちの様子について楽しそうに話してくれる。「教頭先生、聞いて下さい!」と笑顔で話してくれる放課後が、待ち遠しい時間でもある。教職員の話には常に耳を傾け、子供の成長と一緒に喜び、相談事に対してはできる限り解決策をその場で判断し、提案するように心掛けています。生徒指導に関することはもちろんのこと、授業計画、行事計画、校務分掌等あらゆる相談に常に即答できるよう、校内で課題となっていること、もしくは課題になっていくであろうことを素早くキャッチし、準備しておくことが管理職には必要である。教職員に相談されてから対応するのでは、教職員の多忙化解消にはつながらない。常に、学校全体の状況を俯瞰し、課題を発見し、予想されるトラブルに対しては常に最悪の事態を想定し、その対応策を検討しておく。授業や行事や校務分掌等で悩んでいるようであれば、限られた資源、限られた時間の中で取り組める最善の方法をいくつか調べ準備しておく。

決してルールを敷くのではなく、教職員の選択肢の幅が広がるような提案をしていくことで、自然と教職員は管理職に話をすれば必ず何か成果が得られる。そんな関係を積み重ねていくことが、教職員の「報・連・相」につながり、職場環境の改善や業務改善へとつながっていくものと考ええる。

3 おわりに

教職員の不祥事が依然として無くならないのはなぜか。その答えは簡単に出来るものではないが、職場、家庭、地域でのワークライフバランスの崩れからストレスを抱えてしまうことが一因ではないだろうか。教職員のプライベートな時間を確保するためにも多忙化解消に向けた業務改善は必須である。業務改善を行うためには、限られた時間、限られた資源、限られた人材の中でいかに成果を上げていくかという発想が必要である。時間が足りない、ものが足りない、人が足りないと嘆いていても何も始まらない。

まずは、時間を意識すること。限られた時間の中でより多くの成果を上げるためにタイムマネジメントを進め、教職員の意識改革をしていく必要がある。それは単に多忙化解消のために前年度の踏襲をしていくということではなく、教職員としてのやりがいや使命感を失わせないように、新たなことに挑戦することへの後押しも必要である。教職員からの提案について「掛ける時間」と「教育的効果」を比較検討した上で、新たな取組への効果的な支援をしていくことも必要である。「教職員の業務改善」といっても、私たちの職務の中で削減できる業務は限られている。ならば、管理職にできることは教職員が価値あるものに時間を掛けられるよう、その他の部分での時間削減に協力していくことであると考ええる。

学校を動かす

生徒指導を中心とした主幹教諭としての実践

柏市立南部中学校主幹教諭

こまつ
小松

やすし
靖



1 はじめに

昨今、主幹教諭は積極的な配置が行われ、要務を帯びつつある。概して、主幹教諭は充て職として教務主任を担う場合がほとんどであるが、その背景には、校務の一部整理を担う主幹教諭の性質上、教務主任である方が学校運営上の課題に対して柔軟に対応できると広く認識されていることがあろう。しかしながら、学校の実情に応じて、生徒指導主任や学年主任を担う場合もある。本校の場合、生徒指導を学校運営上の課題としているため、同主任を主幹教諭が専任している。これは、主幹教諭の分掌としては特異な場合であると思われるが、本校における実践を紹介したい。

2 校内巡視活動の実施

昨今における生徒指導の現場では、若年層教職員の経験不足に起因して深刻化する指導事例が多々見受けられる。経験不足がゆえに、消極的な生徒指導に終始してしまうことや、報告の遅延による保護者対応の遅れなど、その様相は様々であるが、共通して見られる点は初期対応の不備である。適切な初期対応のためには、その準備段階として「予見」が必要である。例えば若手教員は「生徒を観察して異変を察知し、声掛けを行う。」というようなベテラン教師の何気ないスキルが充分ではないために、指導が後手になる。即ち、「予見」するスキルが不足しているのである。本校では、これをフォローアップするために、全教職員輪番での校内巡視活動を行っている。授業中・休み時間などにおいて「予見」すべき事象があれば、学年や担任と情報共有をし

て初期対応を検討するようにしている。これには、若年層教職員が苦手とする保護者対応も含まれている。

3 若年層研修の実施

本校では、定期的に若年層研修を実施している。テーマは若年層教職員の困り感にフォーカスしたものである。前述した保護者対応についても同研修にて取り上げ、本校における失敗事例を参考とし、ケーススタディを行った。このように、個人の失敗を全体で共有する場を設けることは、学校として同様の失敗を未然防止することに繋がる。また、失敗をケアできる環境構築は、結果的に風通しの良い職場風土の醸成にも繋がる。また、生徒指導以外についても、中堅教諭やベテラン教諭（管理職を含む）が講師となり研修を行った。内容としては、若年層教職員が躓きやすい学級経営や部活動経営に関することから、公金の取り扱いや文書作成・処理の基本に至るまで、様々であった。

4 おわりに

本校の場合、職員の約半数を占める若年層教職員へのフォローアップこそが学校運営の要諦である。そのためには、若年層教職員が相談しやすい職場風土の醸成が必要である。校内巡視活動や若年層研修によって中堅教諭やベテラン教諭が助言を行い、若年層教職員もまた指導を乞うことで、円滑な学校運営に寄与するように努めている。今後も主幹教諭として、生徒指導を中心としながらも、全体をマネジメントできるようにしていきたいと考えている。

 子供を知る

「ほめる」ことの大切さ

浦安市立浦安小学校教諭

うえの りな
上野 莉奈

昨年度の初任者研修で学んだことは、子供一人一人を見つめ、子供に寄り添い、「ほめる」ことの大切さだ。学級経営についての研修では、子供たちが安心して学校生活を送るためには、教師との信頼関係も大切だが、子供たち同士の繋がりがなければいけないことを御指導いただいた。また、自校でも先輩の先生方に子供たちがより良い学校生活を送るための具体的な取組をいろいろ教えていただいた。そして、教師の児童理解、子供たち同士の相互理解を深めるためにクラス全体で回るクラスノートを用意して活用したり、学級活動の時間では、自分や友達の良いところを見つける時間を作るようにしたりした。また、子供に対し否定的な言葉ではなく、肯定的な言葉で接すること、毎日全員の子供たちをほめることを目標にした。ほめられ認められることで、少しずつ子供たちも変わっていった。自己肯定感が高まり、自分に自信を持てるようになった子供もいる。

私は、現在8名の子供たちの特別支援学級の担任をしている。それぞれの目標にひたむきにチャレンジする子供たちを「ほめて伸ばすこと」を目標に、日々試行錯誤しながら毎日を送っている。これからも先輩の先生方にたくさん教えていただいたり、様々な研修に参加したりしながら、子供たちに寄り添い、個々の力を伸ばす支援、指導ができる教師を目指し、成長していきたい。

 子供を知る

生徒とともに

君津市立君津中学校教諭

くぼ たよしかつ
久保田芳克

学生時代から、競技スポーツにいそしんできた私は、競技引退後、指導者を経て、昨年度念願の教員の道を歩み始めた。

2年目となる現在、学校という教育の最前線で、社会人経験を生かせる場面も多く、更に教育のプロとして、新たに学ぶべきことも多い日々であった。今、教員になって良かったと実感できるのは、初任者研修でともに学びあう仲間が存在、私を必要としてくれる同僚の支えや、生徒と過ごす日々の生活が充実していたからだと思う。「子供に負けるな！」これは、教員になってから教えてもらい、心に残った言葉である。そこで、子供に負けないために私は「学び続ける」ことを大切にしている。教員であるという信念と覚悟を持ち、生徒の心に寄り添うためにも学ぶことをやめてはいけないと思う。うまくいかないことも、克服に向けて努力を続けることで、生徒のためにもなる。また、「来年も同じクラスで、自分たちの担任をやってください」「ずっとこのクラスがいい」生徒たちから言われたこの言葉は、何よりも幸せに感じるものであった。生徒にとって担任は一人。どんな担任と出会ったかで、その子の人生が大きく変わる。私はこれからも、試行錯誤を繰り返しながら、こんな言葉を言ってもらえる教員を目指して、生徒と共に学び続けていこうと思う。

「すべては子供たちのために」

授業を
創る

主体的な学びを目指した道徳授業

長生郡白子町立南白亀小学校教諭

せき
関

ひろこ
弘子



1 はじめに

小学校では平成30年4月1日より「特別の教科 道徳」が全面実施され、これからの教育の方向性として示された「主体的・対話的で深い学び」を実現することが求められている。道徳科として教科書を用いた授業が始まり、私は、毎時間の掲示資料やワークシートを作成し、評価の仕方を模索してきた。今後、児童生徒の実態に応じたねらいを設定し、適切な指導方法を選択したり、組み合わせたりしながら様々な展開を考えていくことが課題となる。どのように学ぶかという学びの過程に着目してその質を高めていくことが注目される。

2 主体的な学びを育む指導法

(1) 子供たちの関係性を育む取組

子供たちの属する集団としての学級が、安心して自己表現できる場であることが、道徳科の授業の前提となる。学級集団が、相互に尊重し合う環境にある時、話し合いは充実したものとなる。私が担任した学級では「トーキングサークル」に継続して取り組んでいる。「トーキングサークル」とは、カナダの先住民族から伝わったものとされ、コミュニティの問題解決の対話の手段として注目されている。参加者が輪になって座り、トーキング・ピースを回して順番に発言する。

- ・トーキングピースを持っている人に発言権がある。
- ・もっていない人には聴く義務がある。
- ・発言したくないときや話題の場合はパスできる。

トーキングサークルの進め方

授業の導入で「サークル」の形式により、全員が発言する場を設け、本時の価値に対して意識付けを図っている。

(2) 問題意識を持たせる工夫

教材提示後、「みんなで考えてみたいことはどんなことか」と子供たちに投げかけて、問題意識を持たせるようにしている。登場人物の最初の設定と最後の状況を比較し、なぜ変わったのか、また異なる考えの登場人物の比較等、教材の持つ道徳的な問題に迫っていくような「問い」を設定したい。

教材（内容項目）	みんなで考えたいこと
どうしてこうなるのかな (C 規則の尊重)	やくそくやきまりを まもるわけ
はしのうえのおおかみ (B 親切、思いやり)	ほんとうにいいきもちに なったわけ

「問題意識」の具体例

そのためには、誰もが内容を把握できる教材提示が大切である。発達段階に応じた教材提示の仕方は、問題意識をもたせるための大切な仕掛けとなる。どの学年でも集中して教材の世界に入り込む工夫として、ICT機器やペープサート等を活用した語りに取り組んでいる。

教材との関わりの中で、自分自身への問いかけを深め、今までの体験を重ねながら、より良いものの見方、考え方に気付いていくことが期待される。



「サークル」の形態での話し合い

(3)考えを可視化する手立て

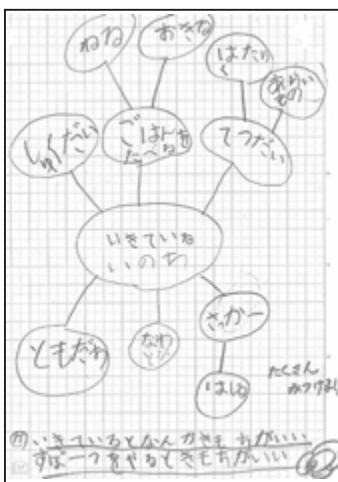
主人公が葛藤する場面が描かれている教材では、問題状況を明確にし、子供たちにじっくりと考えさせたい。視覚的に捉えやすくするための考えを可視化の手立てとして、スケールやネームプレートの活用を試みている。異なる考えに接して自分の考えを深めたり広げたりしていくことが期待される。

きまりを守ることの大切さについて考える授業では、きまりは知っているけれど遊びに夢中になってしまう主人公の心のゆれを視覚化するため、子供たちの発表をシーソーの傾きのように表して周囲の人との関わりから変化する様子を表現した。



傾きで表すスケール

一人一人が自分の考えをはっきりとさせ、学びを深めるために書く活動は重要である。本校では、全校で A4 ノートを用いている。第1学年では、文字を書くことに慣れていないため、ワークシートの吹き出しに登場人物に重ねて自分の考えを書くようにしてきた。今後ノートに直接書くことに移行するため、ウェビングを活用して多面的・多角的に考えさせるよう試みている。



ウェビングによる
考え方の可視化

(4)体験的な学習を取り入れる工夫

子供たちの多様な見方や考え方を引き出すことができるように、指導のねらいに即した問題解決的な学習や、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れてい

くことが求められる。体験的な学習を取り入れる工夫では、自分との関わりで考えられるようにすることが大切である。

生命の尊さについて考える授業では、生きていることを実感することができる



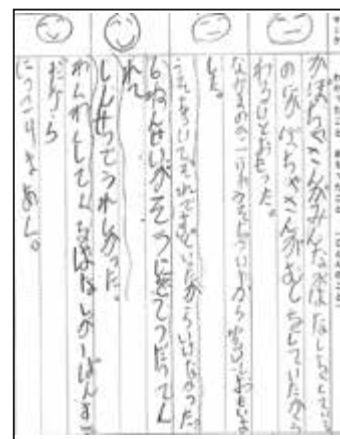
体験的な学習活動の様子

ように、グループの友だちと握手する活動を取り入れた。

(5)評価への取組

「主体的な学び」の視点から、一人一人が考えたことや感じたことをふり返る活動を位置付けていくことが求められる。

道徳科における学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握するための具体的な工夫として、顔のマークと2～3行のコメントを毎時間継続して記入していく振り返りカードを用いている。教材の感想、価値についてわかったこと、自分の体験、今後の実践への意欲等が書かれていて、継続による一人一人の成長を見取る有効な手立てとなった。



毎時間の振り返りカード

3 おわりに

子供たちが主体的・対話的に学ぶ道徳授業となるように様々な試みに取り組んできた。今後、さらに深い学びとなるように実践を重ねたい。

参考文献：

上杉賢士『「ルールの教育」を問い直すー子どもの規範意識をどう育てるかー』
金子書房 2011
加藤宣行編著『子どもに寄り添う道徳の評価』
光文書院 2017